

# 令狐楚について

——その交遊関係を中心に——

## 一、はじめに

——令狐楚と李商隱——

令狐楚〔唐・代宗大曆元年（七六六）〕と玄宗開成二年（八三七）は、晩唐を代表する詩人・駢文家である李商隱〔唐・憲宗元和七年（八二二）〕と宣宗大中十二年（八五八）の生涯と文学を語る上で欠くことのできない人物である。李商隱の文学的才能を最初に認めたのが、令狐楚であるし、その才能を古文ではなく駢文を書くことに用いるように指導したのも、令狐楚である。そして、「牛李の党争」によって、李商隱が不遇な生涯を送らなければならなかったのも、その遠因は令狐楚の知遇を受けたことにある。

まず、『旧唐書』卷一百九十下の李商隱伝から、李商隱が令狐楚の知遇を受けたことについての記事を引用する。

商隱、幼くして能く文を為り、令狐楚、河陽に鎮せし

## 加 固 理 一 郎

とき、業<sup>ノ</sup>りし所の文を以てこれに干<sup>カ</sup>む。年纔か弱冠に及ぶのみ。楚、其の少俊なるを以て、深くこれに礼し、諸子と与<sup>ト</sup>に遊ばしむ。楚、天平・汴州に鎮するや、従ひて巡官と為る。

この記事について、張采田氏の『玉谿生年譜会箋』卷一によれば、「河陽」は「河南」の誤りで、令狐楚が文宗太和三年（八二九）三月に、檢校兵部尚書・東都留守・東畿汝都防禦使となつて洛陽にあつた時に知遇を受け、また「汴州」は衍文であつて、同年の十一月に令狐楚が檢校右僕射・鄆州刺史・天平軍節度・鄆曹濮觀察等使となつた時に、その幕府の巡官となつたということである。そして、この時に李商隱は十八歳である。

次に、この時期に令狐楚が李商隱に対して駢文を書くように指導したことについて、『旧唐書』李商隱伝から引用する。

商隱、能く古文を為り、偶対を喜ばず。令狐楚の幕に從事するに、楚、章奏を能くし、遂に其の道を以て商隱に授け、是れより始めて今体の章奏を為る。博學強記、筆を下して自ら休む能はず。尤も誅奠の辞を為るを善くす。

このような経緯があつて、李商隱はこれ以後駢文を作るようになり、その名手として世に知られるようになるのである。李商隱の古文から駢文への転向は、晩唐の唯美的文学の流行を象徴するできごととして名高い（注一）。そして、李商隱の文学的な経歴をたどるためにも、無視することのできないことである。この転向が、令狐楚の指導によるものであるから、先に述べたように、令狐楚は李商隱の文学を考える上において、重要な人物なのである。

また、中晩唐の政界を揺がせた「牛李の党争」において、李商隱はその両派から排斥される。これについて『旧唐書』李商隱伝を引用する。

王茂元、河陽に鎮せしとき、辟して掌書記と為し、侍御史たるを得。茂元、其の才を愛し、子を以てこれに妻あわす。茂元、書を読みて儒たると雖も、然れども本と将家の子にして、李徳裕素よりこれを遇す。時に徳裕政を乗り、用つて河陽の帥と為す。徳裕と李宗

閔・楊嗣復・令狐楚と大いに相讐怨す。商隱、既に茂元の従事と為り、宗閔の党大いにこれを薄んず。時に令狐楚已に卒し、子、絢、員外郎と為り、商隱の恩に背くを以て、尤も其の無行なるを惡む。俄かにして茂元卒し、来りて京師に遊ぶも、久しくして調されず。

ここで言う、李宗閔・楊嗣復・令狐楚らが「牛党」であり、李徳裕・王茂元が「李党」であつて、当時の政界はこの二つの党派の対立抗争の場となつていた。これを「牛李の党争」という。李商隱は、令狐楚の死後、王茂元の女婿となつたが、その王茂元もほどなくして死去する。そのため、両派のいずれからも排斥せられて、不遇な生涯をおくることになるのである。この李商隱の運命を決した事件も、令狐楚の知遇を受けたことをその発端とする。このことから、令狐楚は無視できない存在なのである。

私は、李商隱の文学について関心を持つているが、それを考究するためには、令狐楚という人物について明らかにしておく必要があると感じた。しかし、この人物については、従来あまり研究がなされていない（注二）。そこで、本論文では、主に令狐楚の交遊関係に注目し、中晩唐の交において彼が果たした文学上の役割について論じたいと思う。

## 二、令狐楚に関する資料

本論に入る前に、令狐楚に関する基本的な資料について記しておく。『新唐書』芸文志に、令狐楚の作品集としては、『漆園集』一百三十卷、『梁苑文類』三卷、『表奏集』十卷が、唱和集としては、李逢吉との『断金集』一卷、劉禹錫との『彭陽唱和集』三卷、僧広宣との『僧広宣与令狐楚唱和』一卷が著録される。しかし、これらはすべて散佚してしまつた。現在見ることのできる令狐楚の作品は、『全唐詩』卷三百三十四に収められた五十九首と、『全唐文』卷五百三十九、四百三十三に収められた一百四十一篇である。伝記に関しては、『旧唐書』卷一百七十一、『新唐書』卷一百六十六にかなり詳細に記されている。

## 三、長慶四年前後の令狐楚

令狐楚が科挙に登第したのは、徳宗貞元七年（七九一）のことで、この時彼は二十六歳であった。その翌年には韓愈が、翌々年には劉禹錫・柳宗元・元稹が登第しており、中唐の新たな文学のまさに興りうとする時、令狐楚も世に出たわけである。登第後、令狐楚は河東節度使の太原の幕府に辟召されて書記となる。その間に彼の文名は高まって

いったやうで、『旧唐書』令狐楚伝には次のような記事が見える。

楚、才思俊麗にして、徳宗、文を好み、太原より奏の至る毎に、能く楚の爲る所を弁じ、頗るこれを称む。

このような文学の才能がものを言ったのであろう、令狐楚は憲宗の代になると、知制誥や翰林学士などの文才を必要とする官職を経て、次第に官界に頭角を現わす。

しかし、令狐楚が官界での地位を確立したといえるのは、長慶四年（八二四）に敬宗皇帝が即位してからである。その年の九月、令狐楚は檢校礼部尚書・汴州刺史・宣武軍節度・汴宋亳觀察等使となる。正三品の礼部尚書を檢校官としたのもさることながら、汴州（現在の開封）に赴任したということは、彼が名実ともに高級官僚となったことを意味していよう。汴州は、黄河と大運河の一つである汴河とが合流する地点にあって、江南と京畿とを結ぶ交通の要衝であり、この地の争奪は唐王朝の死命をも決しかねないのである。よって、この地には中央から有力な刺史や節度使が派遣された（注三）。令狐楚がこの要職についた背景には、彼の属する「牛党」が政権を掌握したという事実がある。この時期の「牛党」の中心人物は、李逢吉である。宰相となった李逢吉は、「李党」の官僚、元稹・李徳

裕・李紳らを相次いで左遷し、さらに長慶四年には宦官王守澄と結んで敬宗皇帝の即位を助け、専制的な権力を持つに至る。その李逢吉は、事あるごとに令狐楚を援助しており、汴州赴任もその力添えがあつてなされたものであるう。

令狐楚が汴州を離れるのは、太和二年（八二八）九月のこと、この地にちょうど四年間赴任していたこととなる。この四年間は、令狐楚が文壇の中心人物の一人となつた時期でもある。下の表は、令狐楚に対する他の詩人たちの贈答・応酬・唱和などの詩を編年し、長慶四年九月から太和二年九月までの期間を中心にして、その前後と作品数を比較したものである。

このように、令狐楚と他の詩人たちとの交流は、この期間を境にして急激に繁くなつてゆく。その原因は、先に述べた「牛党」および令狐楚の政界での地位の向上により、官僚でもあつた当時の詩人たちが令狐楚に接近していったということが、その一つとしてあげられよう。また、汴州が交通の要衝であつたことは先に述べたが、そのため、詩人たちが京畿と江南とを往来する途上で立ち寄りやすかつたことも、その原因であろう。実際に、白居易と劉禹錫が敬宗宝曆二年（八二六）から太和元年（八二七）にかけて、

計	詩人											前	長慶四年 太和二	後	不明	計	
	李商隱 (812 ~ 858)	朱慶餘 (797 ~ ?)	張祐 (792 ~ 852?)	賈島 (779 ~ 843)	姚合 (775 ~ 855?)	劉禹錫 (772 ~ 842)	白居易 (772 ~ 846)	楊巨源 (770 ~ ?)	王建 (768 ~ 830?)	張籍 (768 ~ 830?)	李逢吉 (758 ~ 835)						李益 (748 ~ 827)
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	1				
27	0	1	0	0	1	18	5	1	1	0	0	0	/				
66	1	0	( <sup>2</sup> ?)	4	1	44	12	0	0	2	0	/	/				
5	0	0	0	1	0	1	2	0	0	1	0	0	0				
104	1	1	2	5	2	63	19	1	1	4	3	1	1				

(詩人の生没年は聞一多の『唐詩大系』によつた(李逢吉を除く))

蘇州・和州から連れ立って洛陽へ戻つた時に、汴州の令狐楚のもとに立ち寄つてゐる。

しかし、これだけでは、この時期に令狐楚が文壇の中心人物となつたことの理由づけとして、不十分であろう。このことは、令狐楚自身の文学と、当時の文壇の情況とから説明しなければならない。

#### 四、『御覽詩』と令狐楚の詩文

令狐楚は、憲宗元和九年（八一四）から十二年（八一七）の間、翰林学士であった時に、敕命を奉じて『御覽詩』という詩集を纂進している。これは、令狐楚の、詩に対する選択眼が、皇帝をはじめ高官たちに認められたということであろう。また、このことで、令狐楚の文壇での地位は高まったであろう。

この詩集は、主に中唐期の詩人の作品を集めたもので、唐人選唐詩の一つとして知られている。『四庫全書総目提要』卷一百八十六に、この詩集についての記事があるが、この記事は令狐楚の詩についての評価を述べたものとして適切なものだろう。以下、それを引用しつつ、『御覽詩』および令狐楚自身の詩の特徴を明らかにしてゆく。

まず、『四庫提要』は、『御覽詩』の編集方針を、

其の詩、惟だ近体を取るのみにして、一の古体無し。即ち「巫山高」等の楽府題を用ゐる者も、亦た皆な律詩なり。

と、近体詩のみを集めることがその特色であるとしている。そして、その理由は、

蓋し中唐以後、世々務むるに声病諧婉なるを以て相尚

ぶ。其の奮起して古調を追ふ者は、韓愈等数人に過ぎず。楚も亦た風氣に限られ、自ら異なる能はざるなり。

と、韻律をたつとぶ近体詩を好む風潮に、令狐楚も従ったからであるという。それは彼自身の作品にもいえることで、『御覽詩』には令狐楚の好みが見反映されているのである。

今伝ふる所の詩一卷、惟だ「宮中樂」五首、「從軍詞」五首、「年少行」四首のみ、差や観る可きと為す。氣根色沢、皆な此の集と相同じ。蓋し其の性の近き所を取ればなり。

彼自身の好みが見反映されているということでは、『御覽詩』に採られた詩人の中には、第三章に記した表に出てくる盧綸（二十二首）、李益（三十六首）、張籍（一首）、楊巨源（十四首）が含まれているのも、その現れであろう。特に李益の三十六首と、盧綸の二十二首は、一人の詩人として採られた詩の数の多さで第一位と第三位である。『御覽詩』の纂進以前に令狐楚と交流があったことが確実なのは、盧綸のみであるが、李益・張籍も長慶四年以前に交流があった。よって、『御覽詩』の編集において、令狐楚は自分に近い詩人の詩を多く採用していた可能性がある。

また、令狐楚自身の詩と『御覽詩』の詩の傾向が一致するということでは、『全唐詩』に見える五十九首の令狐楚の詩に、五言絶句二十二首、七言絶句十六首、五言律詩六首、七言律詩八首、五言排律四首、古詩三首と、近体詩が多いことから、それがうかがえる。その中から、『四庫提要』に「差や観る可きと為す」と評されている「宮中楽」五首（『全唐詩』三三三三四）を引用する。

其一

楚塞金陵靖  
 巴山玉壘空  
 万方無一事  
 端拱大明宮

其二

雪霽長楊苑  
 氷開太液池  
 宮中行樂日  
 天下盛明時

其三

柳色煙相似  
 梨花雪不如  
 春風真有意

楚塞 金陵靖く  
 巴山 玉壘空し  
 万方 一事無く  
 端拱す 大明宮  
 雪は霽る 長楊苑  
 氷は開く 太液池  
 宮中 行樂の日  
 天下 盛明の時  
 柳色 煙に相似たり  
 梨花 雪に如かず  
 春風 真に意有り

一麗皇居 一一 麗しき皇居

其四

月上宮花靜  
 煙含苑樹深  
 銀台門已閉  
 仙漏夜沈沈

其五

九重青瑣闥  
 百尺碧雲樓  
 明月秋風起  
 珠簾上玉鉤

宮中で伴奏に合わせて歌われたのであろうこの連作は、一首目で国内が平和であることをうたい、二・三・四・五首でそれぞれ冬・春・夏・秋の宮中の風物をうたっている。『四庫提要』で「声病諸婉」をたつとぶ風潮に従ったとする令狐楚の詩らしく、平仄にはかなり気を使っている。五首とも、あまり嚴格ではない各句の第一字を除けば、完全に絶句の平仄の規則に合わせており、また、第一・四首が仄起であるのに対して、第五首が平起になっており、結びの一首としての変化をつけている。このように平仄には注意しているものの、用いられる詩

語にはさほど新鮮さはなく、詩全体の構成も平凡である。この詩にはまだ多少は好意的な『四庫提要』も、これ以外の令狐楚の詩の多くに対しては、「時作の鄙句」・「拙鈍」といつてかなり酷評している。そして『御覽詩』に採られた詩に対しても、

皆な俗格に渉るも、亦た其の素より習ひて然するなり。

として、それを編集した令狐楚の好みとともにあまり良い評価は下さない。韓愈らの古体詩を高く評価する『四庫提要』の立場からすれば、令狐楚に対する評価は、おのずからこのようなものになるであろう。

このように、令狐楚の詩は、韻律にかなった近体詩である特徴づけられる。そして、その特徴は『御覽詩』の編集にも表われており、これが彼の実作と批評にわたる傾向であるのがわかる。それは、令狐楚がすぐれた駢文作家であったことと関係している。『新唐書』令狐楚伝には、

其の文を為るや、賤奏制令に於て尤も善く、一篇を成す毎に、人皆な伝諷す。

と、彼の文章が人々にもはやされたことを述べている。

例えば、「辞情典鬱にして、文士に重んぜらる」(『旧唐書』令狐楚伝)と評される、元和十五年(八二〇)の作品「唐

憲宗章武皇帝哀冊文」(『全唐文』卷五百四十三)の一部を引用する。

嗚呼哀哉。地開蒼谷、天作豊山、江海自流於泉下、城郭取象乎人間。高封馬鬣、永秘竜顔。鱗有逆兮曾触、髻欲升兮高攀。朝百靈以肅肅、遺八駿以閑閑。

(嗚呼、哀しきかな。地は蒼谷を開き、天は豊山を作り、江海自ら泉下に流れ、城郭象を人間に取る。高く馬鬣を封じ、永く竜顔を秘す。鱗、逆有りて曾て触れ、髻、升らんと欲して高く攀づ。百靈に朝して以て肅肅、八駿を遺して以て閑閑たり。)

このように、全篇がほとんど四字・六字の対句から成る四六駢麗文の形式を、この文章はとっている。令狐楚の前半生は、古文運動が盛んな時期にあたる。しかし、公用文はまだ駢文が用いられており、令狐楚はその名手であったのである。駢文は、対句で構成され、韻律を重んじる文章であるが、内容が空疎であるのを古文家たちに攻撃された。この、韻律を重んじるが内容が空疎であるということは、令狐楚の詩の特徴でもある。令狐楚は、詩作においても駢文家としての性格を表わしたのである。

中唐・元和期の文学といえば、韓愈らの文と詩における復古主義の主張と実作、また白居易らの新楽府による諷刺

のための詩作が特徴的である。しかし令狐楚は、韓愈・白居易らと同世代に属するにもかかわらず、この動きの圏外に身を置いていたわけである。それは、先の表に示されているように、長慶四年以前には他の詩人たちとの交流がほとんどなかったことの原因でもあろう。

## 五、元稹らと令狐楚

しかし、表現の美しさを求めた近体詩の小作品によって特色づけられる令狐楚の詩風は、次第に文壇の主流となっていく。『御覽詩』の纂進よりやや時代は下って元和十五年、元稹が古体詩百首、近体詩百首を令狐楚に献上する。

それらの詩に附された「令狐相公に詩をたてまつる啓」(『全唐文』卷六百五十三)の一部を次に引用する。

(前略)某始自御史府謫官於外、今十余年矣。間誕無事、遂用力於詩章、日益月滋、有詩向千余首。其間感物寓意、可備矇瞽之諷達者有之、詞直氣驕、罪戾是懼、固不敢陳露於人。唯盃酒光景間、屢為小碎篇章、以自吟暢。然以為律体卑痺、格力不揚、苟無姿態、則陷流俗。常欲得思深語近、韻律調新、属对無差、而風情自遠、然而病未能也。江湘間多有新進小生、不知天下文有宗主、妄相倣倣、而又從而失之、遂至於支離褊淺之

詞、皆目為元和詩体。某又与同門生白居易友善、居易雅能為詩、就中愛驅駕文字、窮極声韻、或為千言、或為五百言律詩、以相投寄。小生自審不能有以過之、往往戲排旧韻、別創新詞、名為次韻相酬、蓋欲以難相挑耳。江湘間為詩者復相倣倣、力或不足、則至顛倒語言、重複首尾、韻同意等、不異前篇、亦目為元和詩体。而司文者考變雅之由、往往婦咎於稹(後略)。

この文の中で元稹は、かつて力を注いだ新楽府のような作品を指すのであろう「物に感じて意を寓し、矇瞽の諷達に備ふ可き者」を、「罪戾、是れ懼れ」るために、もはや人に示すことはしないと云う。これは、いわば転向宣言である。そして現在の元稹は、「盃酒光景の間、屢々小碎の篇章を為り、以て自から吟暢す」と、遊芸的な態度で「律体」の詩を作る。そこで彼が注意するのは、「思ひ深く語近く、韻律調新たに、属对差ふ無く、而して風情自ら遠きを得んと欲す」という、主に表現技巧のことである。また友人の白居易の詩作についても、「雅に能く詩を為り、就中文字を駆駕し、声韻を窮極するを愛す」と、その技巧の面を評価する。そして両者が行うのは、「戯れに旧韻を排し、別に新詞を創り、名づけて次韻相酬と為す」という、遊戯的な詩作である。このような詩作は当時に流行し



て、「江湖の間」の「新進の小生」たちが模倣して質の低い作品を作るに至った。そうした情況の中で、元稹の詩を他の二流詩人の作品とは異なり優れたものとして認め、さらに、彼の遊戯的な近代詩を擁護してくれる人物として、令狐楚を目して詩を献上したのであろう。令狐楚はそれに応えて、元稹を「今代の鮑(照)、謝(靈運)なり」(『旧唐書』卷一百六十六元稹伝)と高く評価した。

官僚としての元稹は、李德裕・李紳に近い立場にあって、李逢吉の党に連なる令狐楚とは対立している。だから、その政治的な党派を越えた文学的な交わりは、新しい詩の潮流を築こうとするものとして、より意義深い。しかし、元稹と令狐楚とは、このあたも親しくはならなかった。同じ元和十五年に、憲宗皇帝の山陵使となった令狐楚は、部下の汚職事件によって衡州刺史に左遷される。そこで、

時に元稹初めて幸せらるるを得、学士と為る。素より  
(令狐) 楚と(皇甫) 鑄と膠固にして寵を希ふを惡み、  
稹、楚の衡州の制を草す。(中略) 楚、深く稹を恨む。  
(『旧唐書』令狐楚伝)

というように、両者の遺恨はさらに深くなり、文学的な交わりも絶える。この両者の対立の犠牲となったのが、第三

章の表に見える張祐である。張祐は令狐楚に才能を認められ、詩を皇帝に進献したが、元稹に阻まれて成功しなかった(注四)。令狐楚のような党派性の強い人物にとっては、文学者としての人間関係も、それに制限されがちである。

しかし、元稹の親友で、文学的には元稹と同じような転向をし、政治的にはほぼ中立であった白居易は、その後令狐楚に接近してゆく。そしてその白居易に近かった劉禹錫・王建・張籍・楊巨源もそれにならったのであろう(注五)。

## 六、韓愈の死去と令狐楚

このような文壇の動きとは別に、令狐楚が汴州に赴任した長慶四年には、文学史上の重要な事件が起こる。それは、十二月に韓愈が死去することである。韓愈は、古文運動の領袖であり、官僚としての地位も高かったため、その門下には多くの文学者が集まった。その中の一人が、賈島である。

賈島は、韓愈が死去した時に四十六歳であったが、いまだ科挙に登第できずにいた。よって新しい庇護者を求めなければならなかったのだが、そこで選ばれたのが令狐楚である。李嘉言氏の「賈島年譜」(『長江集新校』上海古籍出

版社、一九八三、一三七〜一七七頁）によれば、賈島が「令狐相公を送る」詩の「梁園趨戟節、海草幾枯春」の句で、「梁園」つまり汴州の令狐楚の幕府に赴いた時から、海辺の草は冬に枯れ春に芽ぶくことを何回くり返したろうか、と述べていることなどの理由で、賈島は長慶四年九月から大和二年十月までの期間に、汴州にて令狐楚に謁したということである。また荒井健氏は、論文「賈島」（『中国文学報』第十冊、一九五九、五二〜九五頁）において、賈島と親しく、かつ李逢吉の門生であった姚合のつてを頼って、賈島は令狐楚のもとへ走ったこと、賈島のように言行に批判のあった貧乏文士を容易に受け入れるのは、「牛党」であることを、述べている。さらに附け加えるならば、當時は「牛党」の全盛時代であることと、令狐楚自身の文壇における地位が向上してきたことも、賈島が令狐楚を選ばなければならなかった理由であろう。

賈島の詩は、「苦吟」あるいは「鳥瘦」と批評されるように陰鬱な印象を与えるもので、令狐楚の詩風とは異なるものである。しかし、政治色が薄く、芸術至上主義的な傾向があるあたりに、両者の共通点があるろう。そして、賈島が令狐楚の知遇を受けたことにより、このころ賈島と詩人グループを形成しつつあった姚合も、令狐楚との文学の上

での交流を深めた。そしてこのグループの一員の朱慶餘も、令狐楚と交流したのである（注六）。

韓愈の死と令狐楚との関係については、もう一つ、文章についても見ておかなければならない。令狐楚は、先に見たように駢文作家であったが、古文運動の時代においてもその文章が高く評価されていた。韓愈の死後、これといった後継者が現われないままに行き詰りを見せた古文に対し、もはや新鮮さはないものの、知識人にとっては親しみやすい文体であったであろう駢文が勢力を盛り返す。そこで、令狐楚は文学者たちに一目置かれる存在になったのではなからうか。

## 七、まとめ

以上、長慶四年あたりから令狐楚と交流する文学者が急激に増加したことを中心に、彼の文壇における地位について述べてきた。令狐楚が文壇の中心人物となった原因は、次のようにまとめられる。まず文学以外の原因は、政治的には彼の属する「牛党」の勢力が強くなったことであり、そして地理的には、彼の任地の汴州が交通の要衝であったことである。そして文学的原因は、近体詩の小品と駢文という彼の文学が、晩唐に向かって流行してゆくものであ

ったということである。令狐楚は、詩においても文章においても、中唐末から晩唐にかけて流行する唯美的文学を先取りしており、またその擁護者ともなった。だから、文芸思潮の変遷とともに、彼のもとに集まる文学者が多くなったのである。

太和二年の九月に戸部尚書となって汴州を離れて長安に赴任した令狐楚は、その翌年に洛陽において李商隱を手厚く遇した。そして最初に述べたように、古文を書いていた李商隱に駢文を書くように勧めた。これは、自らの文学が文壇の主流となったことを感じた令狐楚が、自分よりも才能を持っているかもしれない弟子を得て、それを後継者とするために行わなければならないことであつたのだろう。李商隱はそれに応えて、晩唐を代表する詩人・駢文家の一人となつてゆくのである。

(注一) 森野繁夫氏は『中国文化叢書・5・文学史』(大修館書店・一九六八)のIV・唐代文学論、2・文、で、この問題について次のように述べる。

古文運動はこうして衰退の一端をたどることになるが、晩唐に至つて、古文から駢文に転向した李商隱(813—858)の出現によつて、その頂点に達する。(中略)

このようにして古文は唐末においてその勢力を失い、再び

駢文が文壇の主流を占めるようになった。

(注二) 令狐楚についての研究としては、十孝萱氏が『劉禹錫と令狐楚』(『中華文史論叢』一九八〇年第一輯、二一—二三九頁)で、令狐楚が劉禹錫の詩友であつたことを論じているものと、市原亨吉氏が『三舎人集について』(『吉川博士退休記念中國文学論集』筑摩書房、一九六八、四二九—四四七頁)で、令狐楚が王涯・張仲素と『三舎人集』という詩集を編んだことを論じているものがある。

(注三) 築山治三郎氏『唐代政治制度の研究』(創元社、一九六七)第四章第二節「淮西および河南藩鎮」を参照した。

(注四) 王定保の『唐摭言』卷十一「薦孝不捷」に見える記事。以下にそれを引用する。

張祐は、元和長慶中に深く令狐文公(楚)に知らる。公、天平に鎮せし日、自ら薦表を草し、新旧格の詩三百篇を以て表に随ひて進献せしむ。(中略)祐、京師に至り、方に属せんとするに、元江夏(頴)内庭に偃仰す。上、因りて召して祐の辭藻の上下を問ふ。頴対へて曰く「張祐の彫虫小巧は、丈夫恥ぢて為さざる者にして、或ひはこれを奨激すれば、恐らくは陛下の風教を變せん」と。上これに頷く。是に由りて寂寞として帰る。

(注五) 元頴・白居易らの詩人グループについては、花房英樹氏『白居易研究』(世界思想社、一九七二)の第二章「白居易文学集団」に詳しい。また白居易らがこのころ芸術至上主義的傾向を強めていったことについては、鈴木修次氏「白居易・劉禹錫

と新体の詩」〔唐代詩人論〕下巻、鳳出版、一九七三、二二九  
〜二四九頁）に論ぜられている。

（注六） 賈島らのグループについては、前出の荒井健氏の「賈  
島」を参照した。

（筑波大学大学院博士課程後期）